バカと花妖怪と召喚獣

ほし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと花妖怪と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ２０８２Ｗ

【作者名】
ほし

【あらすじ】
幻想郷から連れてこられた花妖怪こと風見幽香。彼女は果たして文月学園でどのように生きていくのか？
オリキャラも地味に出たりします。後はバカテスのキャラが能力を持っていたりとカオスな事になるためご用心を。

プロローグ（前書き）

本編に関係するって事は無いので飛ばしてもらっても全然構わないプロローグ。

プロローグ

ここは忘れ去られたものが集う場所、幻想郷。
「幽香、別世界に「断るわ」即答しなくてもいいじゃないの……」
「アンタが絡んでロクな事があったためしが無いのによく言えるわね……」
「本当ですよ………聞くだけ聞きますけど、どこに連れてくつもりだったんですか？」
その中にある太陽の畑にはこの幻想郷を創り出した八雲紫、花妖怪こと風見幽香、そして数年前にこの世界に来た向日葵が立っていた。
「確か……文月学園って所があった「行きましょうよ風見さん！！」
「どうしたのよ急に……まさか元いた世界とか？」
「ええ、そうですね」
「向日、もう準備はいいわよ」
「行ってらっしゃい、向「風見さんも行きますよ！」えぇっ！？」
こうして、二人の文月学園での戦いは始まった………

プロローグ（後書き）

はい、開幕オリキャラ出ました。
次回は文月学園に入学させてその後キャラ紹介。

プロローグその2

少年少女移動中………

～家～
「着いたぁっ！」
「…………（明らかに面倒な事になった目）」
「あれ、風見さんどうし「元祖「マスタースパーク」」うわぁぁぁっ－！－！」

「ちょっとやり過ぎたわね…………」
目の前に転がる気絶した人が一人。ちなみに家は多少壊れてもすぐ直る仕様らしい。

「ま、どうせ回復するでしょ」
そういって散策に出かけた。
十分後。
「痛てて………何もあそこまでやる必要はねーだろうよ………」
葵、回復。
「そういやあいつスペルカード使ってたけど俺も使えるのか？」
スペルカード：所詮必殺技的な物。けどそれ自体には何も効果なし。要するにただの紙。
「じゃあ……写符「鏡写し」」
すると、放った弾が周囲に写し出される。
「破壊(クラッシュ)」
そして鏡が破壊され弾が数十倍の量になって様々な方向に動き出す。
そして－－－
「ただいま～……」
ドォン！

「あ…………」
風見さんに直撃した。
「覚悟は……出来てるんでしょうねぇ！！」
「出来てません！」
結局捕まり、石畳の上で正座したまま五時間の説教をくらった。どっかの説教が長い人でもこんなにはしないと思うが……

次の日。
「くっ……急ぐよ、葵！」
「だからって足引っ張って痛たたたた！」
現在、絶賛引きずられ中。足引っ張られてるせいで後頭部が超痛い。
「風見に向日、遅刻だ」
「「あ、おはようございます」」
「全く……とにかく手続きがあるから学園長室に来い」
「分かりましたっと……」

時は過ぎ………
「よし、入ってこい」
「私は風見幽香よ。花を大切にしなかったら殺…ちょっと厄介になるけど宜し「風見さん好きだぁーっ！」」
何故か一名ほどルパンダイブで飛びかかった。まあ、
「………元祖「マスタースパーク」」
はい、気絶しました。
「ああ、俺か。俺は向日葵（むかいあおい）だ。先に言っとくが俺男だからな！」
「「「な、なんだってーー！！」」」

そんなこんなで色々ありながら放課後の屋上。
「いるんだろ？スキマ妖怪」
「あらあら、何の用かしら？」
そう言って両端がリボンで止められたスキマから半分体を出すスキ

マ妖怪。
「分かってるだろ？アイツの事だ」
「ああ、あの吉井って子だっけ？多分……」
「何かしらの能力を持ってるって事だろ？」
「ええ、あの幽香の攻撃を食らって何事もなかった事からすると、何かあるわね」
「そうか、さすがに細かい所は分からなかったか」
あの吉井って奴、面白そうだな。そう思いながら家へと帰った。

プロローグその２（後書き）

スペルカード紹介。

元祖「マスタースパーク」

人一人が余裕で入る太いレーザーを傘からぶっ放す。

写符「鏡写し」

一発の弾を様々な位置にある鏡に写し出し、破壊（クラッシュ）のかけ声で鏡が割れて写った弾が実際の弾幕となる。

キャラ紹介したら一気に一巻まで時間をぶっとばす予定。

キャラ紹介

向日（むかい）　葵（あおい）
二つ名～鈍感な心替わり少女～
過去にこの世界から幻想郷に連れてこられた男。なんやかんやありながらも風見の家で暮らしている。結構モテるらしいが本人が鈍感すぎるため全く気づいていない。また、顔が中性的なせいで女子と勘違いされたり女装させられたりと散々な目に。
能力：精神を入れ替える程度の能力
その名の通り二人の中身を入れ替える。ただし、対象の二人に触れる必要がある。

得意科目：古典、世界史
苦手科目：なし
世界史、古典は大体５００点前後。その他の科目も４００点ぐらい。

召喚獣：黒いコートに打ち上げ花火の筒を持つ。また、２００点消費してスペルカードを使う事ができる。
腕輪：憑依（ひょうい）
一回につき５０点消費。味方の召喚獣一体を対象にし、戦闘終了まで葵の点数、操作で戦う。

ここから原作キャラ←変わった所のみ書いてある。
吉井（よしい）　明久（あきひさ）
二つ名～鉄の切り込み隊長～
能力：受けた力を吸収する程度の能力
ダメージを吸収し、自分の力とする。ただし、攻撃が強すぎると吸収できず、自分自身が受けていないといけない。

土屋（つちや）　康太（こうた）

二つ名～気配の無いムッツリスケベ～

能力：気配を消す程度の能力

説明：特になし。

木下（きのした）　秀吉（ひでよし）

二つ名～声真似のホープ～

能力：声を完璧に真似する程度の能力

一度でもその声を聞いた事があれば、完璧に真似する事ができる。

逆に聞いた事が無ければ出来ない。

キャラ紹介（後書き）

次回から原作スタート。

第1問　全ての始まり（前書き）

バカテスト第1問
問題
「調理のために火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを選んだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いる金属合金の例を一つあげなさい」

姫路瑞希の答え
「問題点…マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点
合金の例…ジュラルミン」

教師からのコメント
正解です。合金なので「鉄」では駄目という引っ掛け問題でしたが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え
「問題点…ガス代を払っていなかった点」

教師からのコメント
そこは問題じゃありません。

風見幽香の答え
「問題点…火力が足りない。マスタースパーク並みの火力でやるべき」

教師からのコメント
鍋ごと焼く気ですか？

向日葵の答え

「問題点…軽いという理由だけでマグネシウムを選んだ製作者の頭。そもそも鍋というのは軽さだけではなく、汚れの付きにくさ、熱伝導の効率などの様々な観点から選ぶべきであり………（以下略）」

教師からのコメント

言い過ぎです。

第1問　全ての始まり

時は過ぎ4月、俺達は2年生となった。
2年生となれば恒例行事と言ってもいい、テストの点数が力となる召喚獣を使った試召戦争が行われる。現在俺はーーー
「何でアンタの時計止まってんのよ！」
「知るかよそんな事！ってかお前飛んで行けよ！」
現在、全力ダッシュ中である。ちなみに俺は飛べない。だって人間だもの。
「風見に向日、もう少し余裕をもって来い」
そう言って目の前にいたスネ……じゃなくて西村先生。人間離れした運動能力、趣味がトライアスロンから鉄人と呼ばれている。正直この人妖怪なんじゃないかと時々思う。
「おはようございます、鉄人さん」
「おはようございます、スネーク先生」
「……お前達は名前だけ覚えられんのか？まあいい、クラス分けの紙だ。受け取れ」
そう言って自分の名前が書かれた封筒を渡してくる。そうそう、このクラスってのは成績が良ければAクラス、悪ければFクラスって具合になってる。でもってクラスによって設備も変わる。Aには豪華に、Fにはボロボロって感じに。で、その設備を奪い取るための唯一の手段がさっきの試召戦争ってやつだがーーまあ、要するにいい設備にしたきゃ勉強しろって訳だ。
「それにしても風見に向日、惜しい事をしたな。お前達は確実にAクラスだと思っていたが……」
「別に今回、俺は風邪ひいただけですしね」
「全く、こっちの苦労も考えなさいよ……ま、私はFクラスで逆に良かったけどね」
「珍しいな、Fクラスを望むのは」

「だって、Ｆクラスとなったら多分一番戦争に関わりがありますよね？戦いと聞けば……フフフ……☆」

あ、スイッチ入ってるな、こいつ。って時間１分しか無いんですけど！

「そうか、お前はそんな奴だったな」

その言葉を鉄人から聞いた直後、俺と風見はＦクラスへと向かった。

第1問　全ての始まり（後書き）

「展開が早すぎる」とのアドバイスを頂いたため、今回はじっくりした感じで書いてみました。
風見「いくら早く書きたいからってそれじゃ本末転倒よ」
作者「………否定できないな」
向日「そんな訳で次回！《花妖怪と自己紹介》お楽しみに！（タイトルは変わる恐れがあります）」

第2問　俺と幽香さんとFクラス（前書き）

次回予告とは何だったのか。

第２問　俺と幽香さんとＦクラス

現在、Ｆクラス前。「２―Ｆ」のプレートが折れかかってるあたり嫌な予感しかしない。
「さっさと入るか」
「ええ、それより荷物置いたら一回闘らない？」
「はいはい、………少しは手加減してくださいよ？」
ちなみに今まで幽香さんと６００戦近くしたが１回たりとも勝ったことが無い。強すぎます。
「邪魔するぞ」
「早く座れ、このウジ虫野郎共」
やっちまったな、雄二。
「へえ………？いい度胸じゃないの？」
「ちょ、ちょっと待て………」
「ちょ～っと、向こうでＯ★ＨＡ★ＮＡ★ＳＨＩしましょっか？」
幽香さん＆雄二退場。
「全く……お主らは「元祖『マスタースパーク』」いつも通りじゃのう……」
「お、秀吉か。お前も「ぎゃぁぁぁぁっ！！」Ｆクラスか」
「そうなんじゃが、何故お主が――」
「葵、時間も無いしさっさと闘うわよ」
「ああ、スペカは４枚でいいな？」
「ええ、それじゃあ――」
「「スペルカード、セット！！」」

少年（？）戦闘中………
「負けた………」
やっぱり負けましたよ。はい。改めて設備を見ると――
卓袱台、畳、座布団。うん、なんて斬新な設備なんだ。で、ＨＲス

タート。
「えー、おはようございます。Ｆクラスの担任を務めます………
福原慎です。よろしくお願いします」
福原先生が薄汚れた黒板に名前を書こうとして、やめた。このクラスはチョークすらろくに用意されてないのか。
「皆さん全員に、卓袱台と座布団は支給されてますか？　不備があれば申し出てください」
先生、この設備自体が不備です。
「座布団に綿が入ってないんですけど」
「我慢してください」
「卓袱台の脚が折れてます」
「木工ボンドが支給されてるので、後で自分で直してください」
「窓が割れてて隙間風が寒いんですけど」
「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので、後で直してください」

これはひどい。しかも壁すら割れかけてるし。………今度にとりでも連れてきて修理頼むか？いや、魔改造されそうだからいいか。一週間前に花火の筒渡して「小型にしてくれ」って頼んだらライトにもなるっていう無駄な機能つけてバズーカになって返ってきたぐらいだし………

「それでは、自己紹介をお願いします。そうですね、廊下側の人からお願いします」

第2問　俺と幽香さんとFクラス（後書き）

幽香：………言い訳は？
作者：………さらばだっ！
ガシッ
作者：〜〜〜〜〜〜！！（肩をつかまれている）
幽香：さて、覚悟は良いかしら？
作者：全然出来てないでぎゃぁぁぁっ！！

花妖怪処刑中………

葵：そんなわけで次回こそ自己紹介です。

第3問　花妖怪と自己紹介

「それでは、自己紹介をお願いします。そうですね、廊下側の人からお願いします」

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。今年1年よろしく頼むぞい」

声を完璧に真似する程度の能力を持っているが本人の演技力ゆえに正直『見たことのある人を完璧に真似する程度の能力』でいいと思っている。一応男らしい。（本人談）だが周囲からは女子扱い。

「………土屋康太」

おう、いたのか。知名度があだ名のムッツリーニ＞二つ名の気配の無いムッツリスケベ＞＞＞本名という異常な式が成立してる男。ムッツリスケベに関しては否定してるらしいがバレバレである。

にしても女子は幽香さん以外いないのかこのクラスは。まあ最底辺のFクラスだし――

育ちはドイツだったたので。趣味は………」

あ、女子の声。少しはむさ苦しさが和らぐ

「向日を殴ったり女装させる事です♪」

代わりに俺が大変な目に遭いそうだ。

「はろはろ～♪」

「よ、よろしく………」

さっき自己紹介してたのは島田美波。下手に隙を作ろうものなら何かしら仕掛けてくる（時々幽香さんもついてくる）個人的には危険度SSSランクの人物である。

「向日葵だ。一年よろしく頼む」
「風見幽香よ、一応この隣にいる　バカ（葵）と一緒に暮らして「総員狙えぇぇぇっ！！」」
来て早々なんて核地雷を持ち出してるんだこの人は！！
とは言っても焦る必要は無い。鞄からバズーカ（ライト付き）を取り出し――
「見習『とろ火のマスタースパーク』」
全員気絶しました。
「相変わらずアンタのは火力低いのね」
「そりゃ普通の人間ですから限界って物がありますよ」
「けどどこかの泥棒は人間よ？」
「…………頑張ります」
俺は思った。そのうち人間やめるんじゃないかと。

「あの、遅れて、すいま、せ……ん……？」
そこには、本来いるはずの無い者、姫路瑞希がいた。
「あ～ちくしょう、死ぬほど眠い………」
それを確認した後、俺は眠りについた。目を覚ますと――
「Ｆクラスは、Ａクラスに『試験召喚戦争』を仕掛ける！」
そうこのクラスの代表である雄二は言った。

第４問　俺たちの勝機（前書き）

問題
以下の意味を持つことわざを答えなさい
（１）得意な事でも失敗してしまう事
（２）悪い事があったうえに、更に悪い事が起きるたとえ

姫路瑞希の答え
（１）弘法も筆の誤り
（２）泣きっ面に蜂

教師からのコメント
正解です。他にも（１）なら「河童の川流れ」、「猿も木から落ちる」、（２）なら「踏んだり蹴ったり」や「弱り目に祟り目」などがありますね。

土屋康太の答え
（１）弘法の川流れ

教師からのコメント
シュールな光景ですね。

風見幽香の答え
（２）泣きっ面にマスタースパーク

吉井明久の答え
（２）泣きっ面蹴ったり

教師からのコメント

君達は鬼ですか？

風見幽香からのコメント
いいえ、妖怪です。

向日葵の答え
（1）にとりの川流れ
（2）泣きっ面で幽香さんに遭う

教師からのコメント
言いたい事が多すぎます。

風見幽香からのコメント
葵、後でじっくりお仕置きね。

第４問　俺たちの勝機

「Ｆクラスは A クラスに、試験召喚戦争を仕掛けようと思う」
「勝てるわけがない」
「これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！」
「姫路さんがいれば何もいらない！」
確かに A クラスの設備は魅力だ。しかし、負ければ設備が１ランク下がる事を考えるとこの反応は仕方ない。
「そんな事はない。根拠ならあるさ」
そう言うと雄ニはある一点を見つめ――
「おい、康太。畳に顔をつけて風見のスカートを覗いていないで前に出てこい」
「…………！！（ブンブン）」
「ふえっ！？」
なあ、土屋。その能力もっと違う方向に生かせよ。で、土屋(ムッツリーニ)の説明が終わって戻ろうとした所を幽香さんが思いっきり頭を掴んで、
「ていやっ！」
「…………（バタッ）」
全力の頭突きを食らわせた。ああ、慧音さんを思い出すな。幻想郷の人里に来て初めて見た光景が頭突きだったしなぁ…………
「それに、向日葵や風見幽香だっている」
あ、何故か呼ばれた。
「向日って唯一鉄人と戦って勝った伝説を持ってる噂の…………」
いや、あれ実質引き分けだったから。
「風見ってあの『文月のサディスト』と呼ば……すんません自分チョーシくれてました！」
どうせ幽香さんが脅したんだろうと思いながらその方向を見ると、
「…………チッ」
傘をしまいながら舌打ちする幽香さんの姿が。そんなだからドＳだ

って呼ばれるのに。
「葵、何か言ったかしら？」
「イヤ、ナニモイッテナイデスヨ？」
危ない危ない。あの人（？）心でも読んでるのかってぐらいの事言ってくるから怖い。
「それにあの二人、学年主席クラスはなかったか？」
要約すると、俺‥どれも大体４００点台。結構安定。　幽香さん‥単科で１０００点超えることもある。
ただし死んでる教科は死んでる。
「当然俺も全力を尽くす」
「坂本って、確か小学生のころは神童とか呼ばれてなかったか？」
「それじゃあ、実力はＡクラスレベルが４人も居るってことかよ！？　もしかしたらやれるんじゃないか？」
「ああ、なんかやれそうな気がしてきた！」
バーロー、神童って言っても所詮過去のものでしかない。実質３人と考えたほうが良いな。
「それに、吉井明久だっている」

シーン…………

「…………」
「…………」
「…………」
「…………坂本、ミーティング行くぞ」
「待て、その前に宣戦布告だ」
「ちょっと!?せめてまともな紹介ぐらいしてよ！」
「「吉井、Ｄクラスに宣戦布告してこい」」
「無視!?……それに、宣戦布告の使者って大体酷い目に遭うよね？」
「そんな事は「大体そうだな」」

「だったらなおさら行かな……」
その時吉井の耳元で、
「（吉井、姫路は危険を顧みない男らしい奴が好きらしいぞ？）」
そう言った途端に
「わかったよ、使者は僕がやるよ」
うん、実に単純だ。

数分後。
「ま、そうなるよな」
そこには、服（だけ）ボロボロな吉井の姿が。
（あ、そういやこいつ能力持ちだったな。『自分の受けたダメージを力にする程度の能力』が。）
「うし、ミーティングの時間だ」
そう坂本は言った。

第５問　俺と補給テストとＤクラス戦

屋上にて。
「で、吉井。開戦はいつから？」
「えっと、今日の午後から開戦って伝えてきたけど」
「そうなると、昼飯食べてから即戦闘って訳ね」
「坂本、このＤクラス戦はどうするつもりなんだ？」
確かにそれは気になるわね。私、葵、姫路は試験を受けてからじゃないと前線に出られないし、何より私達がいない間に代表がやられちゃあ意味が無い。それに先の事を考えるとできれば私達の存在は隠しておきたい。
「ああ、今回は姫路に決めてもらおうと思う」
「わ、私ですかっ!？」
「成程、その代わりに次の戦いじゃあ俺達が暴れちゃっていいって事か？」
「ああ、構わない」
正直出れないのは不満だけど次は思いっきりできるしいいや。
「よし、今回の作戦だが――」
そして、作戦会議が始まった。

午後。
「…………」
現在、テスト中。

「さぁ来い！この負け犬が！」
「て、鉄人!？嫌だ！補習室は嫌だっ！」
「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で補習だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな」
「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！」

「拷問？これは立派な教育だ。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金治郎といった理想的な生徒に仕上げてやろう」
「だ、誰か助け――」

鉄人さーん？人はそれを洗脳って言うんですよ？

さらに時間は経ち……
「俺一人かよ……」
試験の終わった姫路はDクラスにばれない様に幽香さんが空飛んで運んでくれました。さて、そろそろ決着が

「連絡いたします。船越先生、船越先生。吉井明久君が体育館裏で待っています。教師と生徒の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです」
つきそうだな、うん。吉井の命はともかくとして。

大体の生徒が下校する時間。
「うぉぉぉぉ！！」
お、決着ついたみたいだな。多分Fクラスの勝利だろうけど。
「ま、俺はさっさと帰るとしますか」

「Bクラスの設備を壊す代わりに設備交換は無しにした？」
「ええ、そうみたいね」
うーん、設備交換をしないのは恐らくモチベーションの維持だとしても何でBの設備なんかを壊す指示をしたんだ？
「で、設備を壊す理由は分かるか？」
「知らないわよそんな事。何でも次の戦争で重要らしいけど……」
何を考えているのかますます混乱してきたなオイ。まあ、細かい事

は明日考えるか。

第６問　俺と昼飯と死を見せる弁当

「良かったらどんどん食べてくださいねっ」
女子からの手作り弁当。それを聞いて食べない男はいるだろうか？
しかし、俺たちは食べない。いや、食べられる状況で無かった。そう、目の前にある弁当は――
「…………（ガクガク）」
人を殺しかける程度の弁当であった。

～今から数分前～
「よし、昼飯を食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」
えっと、確か文月学園だよな？そのメニューはてっきり幽々子さん専用かと思っていたがそうじゃなかったか。
「あ、あの。皆さん……」
「あ、姫路も一緒に学食行くか？」
「あ、いえ、えっと……お昼なんですけど、昨日の約束で………」
昨日の約束、昼飯を元に脳内検索にかける。
「おお、もしや弁当かの？」
ああ、そういえばそんな事あったな。
「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ」

そして雄二、島田は自販機に飲み物を買いに行き、今に至るわけだが――
「（幽香、どう思う？）」
「（少なくとも普通の弁当ではなさそうね）」
「おう、待たせたな！へぇ、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」
最悪と言ってもいいタイミングで登場の雄二。そして、卵焼きを口に放り込む。

「「あっ、雄二!?」」
バタン━━ガシャガシャン、ガタガタガタガタ
ジュースの缶をぶちまけて倒れた。雄二、お前の事は（三分ぐらいは）忘れないよ。

「さ、坂本!?ちょっと、どうしたの!?」
雄二が目で話しかけてくる。
「（毒を盛ったな？）」
失礼な。
「（毒じゃない、多分姫路の失敗だ。それに毒を盛るにしても一撃で殺すぐらいのやつにしてるっての）」
「（随分と物騒だなオイ!）」
「姫路、この中に何が入ってるの？」
そう幽香さんが聞く。回答によっちゃ姫路が死ぬな。
「えっと、酸味がほしかったので、硫酸を……」
とりあえず卵焼きに酸味なんてのはいらないしその上料理に薬品ってどういう事だよ。
「へぇ……ねえ、ちょっと話があるんだけど」
あ、この声と笑顔からすると説教1時間程度で済むな。

「で、次はどこを落とすんだ？」
「次の目標はBクラスだ」
そういやDクラスとの交渉で空調をどーたらこーたら言ってたな。
「どうしてBクラスなの？目標はBクラスなんでしょ？」
「正直言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」
「成程、Bを利用して連戦に持ち込もうって訳か。そいじゃ、行ってくるぜ」

Ｂクラス前。
「俺たちＦクラスはＢクラスに対して試召戦争を申し込む」
「ハッ、Ｆクラスごときが何を言ってるんだ？ボコボコにしちまうぜ？」
「何を言ってるんだ？てめえらごとき潰すのは簡単な事だ」
そして、Ｆクラスに戻ろうとする。
「待てよ、そう簡単に終わらせるとでも思ってんのか？」
デスヨネー。
「上等だコラ。テメエら三下ごとき束になっても怖かねぇんだよ」
「そんな事、今にも言えなくしてやるよ！」
相手は大体３０人。敵は前方のみ。ならこれでいいか。
「見習『とろ火のマスタースパーク』」
はい、全滅。
そして何事も無くＦクラスに戻った。

第７問　俺とスペカとＢクラス戦（前書き）

以下の文章の（　）に正しい言葉を入れなさい
「光は波であって、（　）である」

姫路瑞希の答え
「粒子」

教師のコメント
よく出来ました。

向日葵、風見幽香の答え
「マスタースパーク」

教師からのコメント
そう書くと思ってました。

第7問　俺とスペカとBクラス戦

次の日。
「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か？」
「「「「おおーっ！」」」」
おい、殺すなよ？間違っても殺すなよ？
今回の作戦は向こうを教室に押しこむ単純な作戦。そのためBクラスのある新校舎とFクラスのある渡り廊下戦では護衛を除く全員を投入するらしい。

キーンコーンカーンコーン
昼休み終了のチャイムが鳴る。
「よし、行って来い！目指すはシステムデスクだ！」
「サー、イエッサー！」
Bクラス戦が始まった。

「いたぞ、Bクラスだ！！」
「高橋先生を連れているぞ！！」
高橋先生って事は総合科目での勝負。こっちは相手に文系が多いってのもあって数学の長谷川先生。この人何故か召喚範囲が広いんだよね。そうそう、前線指揮が俺、部隊長は明久と秀吉らしい。
「10人とはなめてかかって来てるな……生かして帰すな！前線部隊突撃！」

Bクラス　野中長男　総合1943点
VS
Fクラス　近藤吉宗　総合764点

Ｂクラス　金田一祐子　数学１５９点
ＶＳ
Ｆクラス　武藤啓太　数学６９点

やっぱり格が違うな。へ？無駄に犠牲になった？いや、あれは必要な犠牲のはず。……多分。
「前線部隊は一旦引け！俺が援護する！——試獣召喚（サモン）！」
俺の召喚獣は動きやすく改造された学ランに打ち上げ花火の筒（片手で支えられるほど小型）

Ｆクラス　向日葵　数学４２１点
ＶＳ
Ｂクラス　野中長男　数学１９２点
Ｂクラス　金田一祐子　数学１５９点

「「なっ！？」」
そりゃそうだな。Ａクラス並の点数なんだから。
「……けど近づけば何も出来ないでしょ！」
成程。これを砲撃用として読んだか。けどな、
「おらっ！」
こいつは殴るためにに存在するんだよ！
「「「えええええええっ！？」」」
「いや、これって……普通だろ？」
「「「どこが普通だ！」」」
この瞬間だけ、ＦクラスとＢクラスの息があった気がした。
Ｂクラス　金田一祐子　数学０点
余談だが、今の一撃で相手の召喚獣は天に召されていた。

「お、遅れ、まし、た……ごめ、んな、さい……」
「まだ一人しか倒してないの？それとも……私の為に残しておいて

くれたの？」
そこにメイン火力の姫路と幽香さんが到着。これで勝つる！
「来たぞ、姫路瑞希だ！」
「全員でかかれ！」
「悪いな、姫路に幽香。早速向かってもらえるか？」
「は、はいっ。行って、きます」
「はいはい、試獣召喚（サモン）っと」

Ｆクラス　向日葵　　数学４２１点
Ｆクラス　風見幽香　数学５０２点
Ｆクラス　姫路瑞希　数学４１２点
ＶＳ
Ｂクラス　岩下律子　数学１８９点
Ｂクラス　菊入真由美　数学１５１点
Ｂクラス　その他７名　数学平均１８１点

「嘘でしょ！？何であんなのがＦクラスにいるのよ！」
「姫路、全力でかっ飛ばせ！」
「は、はいっ！」
姫路の召喚獣が腕輪のついた左手を前に出すと、腕輪から光線が放たれる。
「じゃあ私も行きますか！幻想式決闘流儀（げんそうしきけっとうりゅうぎ）、携帯獣『種乱射銃』！」
そう言うと幽香さんの足元から花が出てくる。そして、一斉に種を発射した。
……なあ、これどう考えてもポ○モンのタネマシンガンだよな。
「暴れ足りねぇなぁ！写符『鏡写し』」
こっちは召喚獣本体の能力で撃つ。ただ一回２００点なんだよなぁ……
まあまだ生きてる召喚獣もいることだし、
「姫路、幽香！」

「ええ（はいっ）！」

姫路は左手を前に、幽香さんは持ってる傘を前に、俺は花火の筒を構える。どうでもいいけどよく傘まで再現したよな。

「「「協力『トリオ・ザ・スパーク』！！」」」

前方を埋め尽くす巨大な光線。ってかこれオーバーキルだよな。

Ｆクラス　向日葵　　数学２１点
Ｆクラス　風見幽香　数学３００点
Ｆクラス　姫路瑞希　数学３１２点

ＶＳ

Ｂクラス　岩下律子　　数学０点
Ｂクラス　菊入真由美　数学０点
Ｂクラス　その他７名　数学０点

「今だ！Ｂクラスに攻め込め！」

「うぉぉぉぉっ！」

まあ、こんなもんだな。

第8問　私と人質と彼の能力（前書き）

やっと葵が能力使用。正直このぐらいしか使いどころ無いような……

では、第8問どうぞ。

第8問　私と人質と彼の能力

「こいつはひでぇな……」
Fクラスに戻った俺の目の前には穴だらけの卓袱台、へし折られたシャーペンに消しゴムが。
「酷いね。これじゃ補給がままならない」
「うむ。地味じゃが点数に影響の出る嫌がらせじゃな」
「それにしてもやる事が地味ね。やるなら教室壊すぐらい」
「「「それはやりすぎだ（じゃ）」」」
いや、実際この人やりかねないけどね。
「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」
そこに、代表である雄二が割り込んでくる。
「雄二、わざわざ教室を空にするとはお前らしくないな」
「協定を結びたいと言ってきてな。それで教室を空にしていた」
「協定？」
「ああ。４時までに決着がつかない場合、戦況をそのままにして続きは明日午前９時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止するってな」
「それ、承諾したの？」
「そうだ」
何か妙だな。あの卑怯で評判の根本がこれだけで終わらせるはずは無いと思うが気のせいか？
「大変だ、坂本！」
「ん、どうしたんだ？」
「島田が人質に取られた！おかげであと二人なのに攻めあぐねている状況だ」
だよなぁ！終わるわけ無いと思ったよ。
「そうか……葵、風見！島田を頼んだ！」

「了解。さて、幽香、どうする？」
「ええ、━━ムッツリーニ、盗聴器と受信機を2セットお願いできる？」
「……すぐに用意する」

「《こちら葵。現在Aクラス教室内だ》」
「《そう。向こうはAクラスの近いほうの入り口だけどどうする？》」
「《どうにか後ろまでにできないか？》」
「《……頑張る》」
「そこで止まれ！　それ以上近寄るなら召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」
現在、Bクラス前。
「(風見さん、どうする？)」
「(私に任せなさい)」
そして、前線へと出る。
「Bクラスの皆さん、ごきげんよう。そして━━ウチのクラスのメンバーを人質にするとは、いい度胸ねぇ？」
「……っ！」
ほんのちょっとだけ妖力を表に出すだけで退いてくれるし、楽な物ね。そしてこの距離なら、
「《葵！》」
「《了解！》」
Aクラスの扉が勢いよく開く。
「だ、誰━━」
その瞬間、葵の手が相手の肩へと触れてわずかに光を発した。
「お、おい！どういう事だよ！？」

「全軍……突撃ぃっ！」
それと同時に島田の召喚獣を捕らえていたうちの片方が離れる。これなら行ける！
「試獣召喚（サモン）！」
Ｆクラス　風見幽香　数学３００点
ＶＳ
Ｂクラス　鈴木二郎　数学３１点
Ｂクラス　吉田卓夫　数学１８点
「……まったく話にならないわね」
躊躇無く突きをかまし、あの二人は補習室行き。行く直前に葵が能力解除してたし大丈夫ね。
その後、私と葵は補充テストを受けて４時となった。

第？問　一つの難題（前書き）

問　以下の問いに答えなさい。
「ベンゼンの化学式を答えなさい」

姫路瑞希の答え
C6H6

教師からのコメント
簡単でしたね。

向日葵の答え
C6H6（いい感じの答えが思いつかなかった）

教師からのコメント
真面目にやってください。

風見幽香の答え
知らない。

教師からのコメント
わざわざ書かなくても良いです。

土屋康太からの答え
ベン＋ゼン＝ベンゼン

教師のコメント
君は化学をなめていませんか。

吉井明久の答え

B－E－N－Z－E－N

教師からのコメント

後で土屋君と一緒に職員室に来るように。

第？問　一つの難題

現在、午後４時３０分。協定通り休戦中である。

「さてと、戦況はどうだ？」

「計画通り向こうの教室前まで攻め込んだが、こちらの被害も少なくないな」

「しかし、どうした物だ……？」

そう、あの協定はこっちに有利すぎるのだ。恐らく何かを仕掛けているはずだが……考えすぎか？

「葵に風見、Ｃクラスに行くぞ」

「急にどうしたんだ？　雄二」

「Ｃクラスに怪しい動きがあった。念のため不可侵条約を結びに行くところだ」

「成程、俺たちはその護衛って訳か」

そして、姫路、康太、雄二、明久、幽香と共にＣクラスに。

「Ｆクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

「私だけど、何か用かしら？」

確かＣの代表はヒステリーな小山だっけ。

「Ｆクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？　ふぅん……」

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねぇ……どうしようかしら、根元君？」

……っ！まずい！

「代表！急いで撤退しろ！」

「逃がすな！坂本を討ち取れ！」

よりにもよって向こうの連れているのは長谷川先生、すなわちフィールドは数学。いくら回復したとはいえせいぜい半分程度。勝つのは難しい。

「（幽香、点数はどうだ？）」

「（大体アンタと同じくらいよ）」
くっ、こんな時に腕輪が使えないってのは辛いな。せめてもう一人いれば……
「はぁ、ふぅ……」
流石に姫路には全力疾走を続けるのはきつかったか。
「数学に自身のある奴以外は即座にＦクラスに行け！明久、お前は背負ってでも姫路を運んで行け！」
「姫路さん、ごめん！」
「ふえっ！？」
……まさか本当にやるとは思わなかったぞ明久。まあいい、残っているのは島田に幽香と俺か。
「「「試獣召喚（サモン）！！」」」
Ｆクラス　島田美波　数学１７１点
Ｆクラス　風見幽香　数学１７６点
Ｆクラス　向日葵　　数学２２１点
ＶＳ
Ｂクラス　モブ５人　数学平均１８９点
人数も何も不利か。こうなりゃやるしかねえ！
「島田に幽香、後を頼む！」
出来れば明日までとっておきたかったスペルだがこの状況じゃ仕方ないな。
「とある商人は言った。『この矛はどんな物も貫ける』と、またとある場所では『この盾はどんな物も防ぐことが出来る』と。そこで一人が言った、『その矛でその盾を突いたらどうなるのか』これが『矛盾』の由来――難題『全てを斬る剣と全てを防ぐ盾』」
「たかが装備が変わっただけだ！行くぞ！」
装備が変わっただけ？笑わせる。
「おらぁ！」
全力で斬りつけるが、相手もガードする。しかし――

ザシュッ！

Ｂクラス　モブＡ　数学０点

「言ったろ？この剣は全てを斬るって」

もっとも、このスペル６０秒しか持たないんだけどな。

「くっ………」

遠距離から銃での攻撃を仕掛ける召喚獣。それを見て剣を消し目の前で手を振る。するとその軌道上に壁が現れる。

「甘いっ！」

踏み込んで躊躇無く切り裂く。

「葵、こっちも終わったわよ」

「こっちもよ」

「何も被害は無し、って所か。戻るぞ」

第？問　一つの難題（後書き）

スペルカード紹介
難題『全てを斬る剣と全てを防ぐ盾』
葵のスペルカード。宣言すると、剣が具現化。その剣はあらゆる防御を無視して相手に致命傷を負わせる。目の前で手を左右に振ると軌道に合わせて盾が出現。その盾はマスタースパークすら完全に防ぐ。
ただし、剣のある状態で盾を出そうとすると強制的にスペルブレイク（スペルの効果終了）となる。
ぶっちゃけ相手が攻めに特化すると弱いスペル。

今更ながらスペルカードについて。
～召喚獣式スペルカードルール～
一、戦争開始30分前までにどのスペルを使うか学園長に申告すること。申告の無い場合は最後に申告した組み合わせとする。
二、スペルブレイクについては以下の場合となった時。
二ー壱　スペルカードの切り替え時、前に使っていたスペル
二ー弐　スペル発動時から相手の攻撃により50点以上減らされる
二ー参　スペルカード発動から一定時間の経過
三、壱の場合、通常スペルにおける参の場合、その日は該当するスペルを使用不可能とする。
四、弐の場合、もしくは耐久スペルか武器変化のスペル時において参の場合となった時、その戦争中は該当するスペルの使用不可。
五、その他は幻想境のスペルカードルールに準拠する。

第１０問　処刑は汚き根本の為に（前書き）

根本フルボッコ回。

第１０問　処刑は汚き根本の為に

ｖｓＢクラス戦２日目

「今から昨日言った作戦を実行する」
「作戦って、Ｃクラス対策のやつか？」
現在、８時３０分。戦争開始には少し早い時間だ。
「ああ、その為に秀吉にこいつを着てもらう」
そう言って雄二は女子制服を取り出す。どこから仕入れたんだよそんな物。
「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」
秀吉、そこで断らないから女子だと勘違いされるんだと思うぞ。
「要するに木下（姉）になりきってＣクラスの矛先をＡクラスに向けさせようって事だろ？」
「そういう事だ」

少年（？）罵倒中……（詳しくは原作一巻）

「Ｆクラスなんて相手にしてられないわ！　Ａクラス戦の準備を始めるわよ！」
恐るべし、秀吉。ってもう５５分か。そろそろ開戦だな。

Ｂクラス前。
「ドアと壁をうまく使って　戦線（フィールド）の拡大を阻止して！勝負は極力単教科、補充も念入りに！」
「「「サー、イエスサー！」」」
代表の作戦だと『教室内に敵を閉じ込めろ』って作戦。今の所は順調だけど……

「………」
うちのクラスの切り札の一角である姫路の様子がおかしい。
「（葵、姫路の様子がおかしい気がするんだけど……）」
「（やっぱりか。俺もおかしいと思ってた）」
とは言ってもその原因が見つからないことには解決しないし……辛い状況ね。
「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」
「数学教師はどうした！」
「Bクラス内に拉致された模様！」
くっ……現代国語じゃ私の点数は無いに等しい。これはなおさらきつくなったわね。
「姫路、左側の援護を頼む！」
「は、はいっ！………あっ……！」
動こうとした姫路が急に動きを止める。その先には根本の持っている謎の手紙が。
「成程ねぇ……葵？」
「ああ、あの野郎━━」
「「「絶対、ぶち殺す！」」」
って、あれ？
「吉井、まさかお前もか？」
「うん……姫路さんのためにも、絶対奪い返す！」
「じゃあ……教科が教科だし、私は別行動でいいかしら？」
「ああ、構わない」
私の出来る役目とすれば、本来の作戦、葵たちの攻撃方向以外からの第3のルートからの攻撃。

「全軍一時撤退！」
「逃がすな！」
「させやしねぇよ。Fクラス向日葵、吉井明久が前のBクラス全員

に戦いを申し込む！」
「「「「試獣召喚（サモン）！！」」」」
Fクラス　向日葵　　現代国語　４６０点
Fクラス　吉井明久　現代国語　７１点
ＶＳ
Bクラス　モブ×６　　現代国語　平均１３２点
「憑依、対象は吉井明久！」
「まずはザコの吉井から殺るぞ！」
おいおい、仮に憑依してなくてもあいつはかなりの操作を誇る。仕留めるのは困難。しかも俺の腕輪で操作を犠牲にする代わり――
Fクラス　吉井明久（向日葵）　現代国語　４１０点
ＶＳ
Bクラス　モブ×６　　現代国語　０点
俺の操作、俺の点数で戦うことになるんだよ！
「なっ！？」
「吉井、突撃だ！」
ゴォッ！
その瞬間目の前にレーザーが。こんなのを出せる奴は……
「流石ね、葵」
幽香しかいねえよな。
「くっ、近衛部隊！」
「葵、ここは私と吉井で引き止めるから先に行って！」
「上等！さぁて、根本。楽しい　戦い（パーティー）の時間だァ！」
「くっ……　試獣召喚（サモン）！」
Fクラス　　向日葵　　現代国語　４１０点
ＶＳ
Bクラス代表　根本恭二　現代国語　１９１点
さて、ここで俺の能力の補足だ。俺の『精神を入れ替える程度の能力』ってのは元に戻った時――

「蘇れ、悪魔の剣よ――記憶『レーヴァテイン』」
条件はあるが、スペルを一枚コピーできる。
「くっ……！」
「あばよ、卑怯者」
俺の剣が根本の召喚獣を一閃し、

Ｆクラス　　向日葵　　現代国語　２１０点
ＶＳ
Ｂクラス代表　根本恭二　現代国語　０点

Ｂクラス戦に決着がついた。

戦後対談。
「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くか。負け組代表？」
「………………」
おお、さっきまでの強気な態度が嘘みたいね。
「本来なら設備を明け渡して貰い、お前らには素敵なちゃぶ台をプレゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」
目標はＡクラスだし、こんな所正直必要ない。
「けど、こっちの条件を飲んでもらえればだけどな」
「……条件は何だ？」
「条件？　それはお前だよ、負け組代表さん」
「俺、だと？」
「ああ、お前には散々好き勝手やって貰ったし、正直去年から目ざわりだったんだよな」
そのコメントにＢクラスからのフォローは皆無。根本の人望がよく分かるわね。
「そこでだ。Ａクラスに行って、試召戦争の準備が出来てると宣言して来い。そうすれば今回は設備についてはは見逃してやっても良い。ただし、宣戦布告はするな。あくまで戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」
根本クン？それだけなわけ無いでしょ？
「ええ、これを着ていったらね」
そう言って懐から女装セットを出す。こんな奴に使うのは勿体無いけどね。（本来は葵用）
「ば、バカな事を言うな！　この俺が、そんなふざけた事を！」
「Bクラス生徒全員で、必ず実行させよう！」
「任せて！　必ずやらせるから！」
「それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！」
……根本クン？一体何をやってきたのかな？
「代表、その前にコイツを借りて行っていいかしら？」
「ああ、構わない」
「幽香、俺も一緒に行くぞ」

少年少女処刑中……

「すっきりしたわね♪はい、代表さん？」
渾身の笑顔で根本を投げ渡す幽香。
「風見、何で所々黒こげなんだ？」
「え？ちょっとお話しただけよ？」
マスパ１０発撃ったのにどこがちょっとなのか問い詰めたいぐらいだよ。……まあ、俺が言えないけどな。（記憶『レーヴァテイン』で４~５０回ぐらい斬った）
「そうか。じゃあ、さっさと着替えさせるぞ」
無視！？まさかの無視！？
「さて、今回はアイツも頑張ったし、……ってかそろそろあの二人には気づいて欲しいけどな」

そう俺は呟いた。

第１０問　処刑は汚き根本の為に（後書き）

スペルカード紹介
記憶『レーヴァテイン』
とある悪魔の妹の弱体化バージョン。弾幕は出ないものの、威力に関しては
難題『全てを斬る剣と全てを防ぐ盾』の剣と同等クラスの威力を誇る。けっこう重いらしく、両手で持つのが精一杯らしい。

次回は告白イベント。（のはず）

第１１問　彼まで届け、私の想い（前書き）

今更ながら感想をくれた皆さん、ありがとうございます！
今回は作者の力不足を感じた回でした………もっと上手く書けるようになりたい。
それでは、どうぞ。

第１１問　彼まで届け、私の想い

「落とし物は持ち主に、っと……」
葵から預かった根本君の制服の中にあった封筒を手に持ち、僕は今Ｆクラスにいる。ちなみにあの制服は焼却炉で燃やした。別に元々焦げてたし変わらないよね？
そしてこの封筒を姫路さんの鞄に入れれば作戦終りょ
「吉井君！」
「ふぇっ！？……ああ、姫路さんかぁ……」
「あ、あのっ、その手紙ですけど……」
「あ、うん！今すぐ姫路さんに返——」
「返す必要はありませんよ？だって、その手紙は既に届いてるんですから——」
「へ？」
だって、この手紙って雄二のためのものじゃ……そう思っていると姫路さんは顔を真っ赤にして頭を勢いよく頭を下げながら叫んだ。
「吉井君、ずっと好きでした！私と付き合ってください！」
「………え？」
「吉井君……？」
「ぼ、僕も、姫路さんの事が……大好きです！！」

一方、教室の外では……
「上手くいったみたいね、葵？」
「ああ、俺が手を貸す必要も無かったみたいだしな」
「それじゃ、帰りましょ？」
「そうだな……うおっ！？」
戻ろうとした最中、何故か近くにおいてあったバナナの皮で転ぶ俺。

「きゃっ！」
で、その流れで幽香に倒れ掛かる。
「お、風見に葵。こんな所で何やって━━」
そこに雄二がやってくる。まあ、状況の整理だ。俺は今、勢いで倒れた幽香の上にうつ伏せで倒れている訳だ。他人から見れば、
「……さて、帰るか」
「せめて話を聞いてくれぇぇぇっ！！」
俺が押し倒してるようにしか見えないよな。その後、３０分かけて話をした結果、何とか誤解は解けた。こんな事で異端何ちゃらに追われるのは御免だしな。そんな事があって、
「…………………」
「あの……怒ってます？」
非常に気まずい事になってるんだ。
「……目を食いしばって歯を閉じなさい」
「幽香さん、それって逆「いいから早く！」ハイ……」
あ、こりゃ伝家の宝刀の右ストレートだな。そう思いながら目を閉じる。
「…………」
来るであろう衝撃に備えて身を固める。すると不意に俺の頬に何か柔らかい物が押し付けられた。
「はい、もう開けて良いわよ」
「へ……？幽香、今のって━━」
「さぁーて、ご飯の準備でもしないとね！」
まるで何も無かったかのように振舞う幽香。一体なんだったんだ？

第１１問　彼まで届け、私の想い（後書き）

最後の最後に幽香さんデレる。それでも気づかない葵。

流石鈍感は格が違った。

第１２問　最後（？）の作戦会議

Ｂクラス戦の終了から2日後。
「まずは皆に例を言いたい。周りの連中に不可能だと言われていたにも関わらずここまでこれたのは、他でもない皆の協力があっての事だ。感謝している」
「お前らしくないな。雄二」
「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」
「けどまだ一番の問題であるＡクラス戦が残ってるのよ？」
「ああ、残るＡクラス戦だが、これは一騎打ちで決着を付けたいと考えている」
一騎打ちっていうと代表同士が一対一で戦うってやつだっけか？だとしても勝機はほぼ無いに等しいはずだし、何かしら策はあるはず。
「ふぅん、で、誰が戦うのよ？」
「当然、俺と翔子だ」
「バカの雄二が勝てる訳……」
シュッ（雄二がカッターを投げる音）
ボンッ！（カッターと弾がぶつかる音）
パラパラ（カッターが粉々になる音）
「チッ…………」
「そんな事してる暇があったら説明したらどうだ？」

代表説明中……

要するに満点ありで向こうは『大化の改新』が出たら間違えるから勝てるらしいが逆を言えばたとえ出てもこちらが満点を取らなければ勝てない。……幽香に言って勉強させるよう言っとくか。そんな訳で今、Ａクラス前にいる。

「一騎討ち？」
「ああ、俺たちFクラスは、Aクラスに一騎打ちを申し込む」
「断るわ。その勝負、私達にリスクしかないじゃない」
ああ、そういえば一騎打ちに関しては断れるんだったな。
「断ってもいいが、その時はBクラスが攻め込んでくるぜ？わざわざ2回も試召戦争をやるよりはこっちにのった方が得策だろ？」
「……なら、一騎打ちを7回やるってことでどう？」
うーむ、こっちの勝てる要素は姫路、俺、幽香、ムッツリーニ（後の二人は教科限定）と一応明久、雄二か。流石にギリだと不安だな。
「そんな7回なんてめんどくさい事するより、5回でいいんじゃないか？」
「駄目よ。7回じゃないとこっちの勝てる要素が無いからね」
どうにかして5本勝負に持ち込まないとな……あ。リスクはあるが一応案は思いついたな。
「なら俺と風見は出ないから5本勝負でどうだ？」
「うーん……その言葉を鵜呑みには出来ないし……」
「……受けてもいい」
「うぉっ！？」
ああ、向こうの代表の霧島翔子か。
「……その代わり、一つ条件」
「何だ？」
「……負けたほうは勝ったほうの言う事を何でも一つ聞く」
「ああ、上等だ。じゃあ細かい所を詰めるとするか。後でこんなこと聞いてなかったとか言わないようにな」
「それはこっちの台詞よ」
で、結果的に。

・互いのクラスから代表者を5人選んでの代表戦とする。
・Fクラスは代表者に風見幽香、向日葵を入れることを禁止する。
なお、元々の代表者が用件等により出場が不可能となった場合はこ

の限りではない。
・教科選択権はFクラス3回、Aクラス2回。
・以上の事に反した場合、違反したクラスの敗北とする。

「さて、こんな物でいいだろ？」
「……構わない」
「すいません高橋主任、これを預かってもらえますか？」
「了解しました」
「これでもう書き換えは出来ないって訳だ。２時間後にまた会おう」
そして、Ｆクラスへと戻っていった。

「幽香、雄二に日本史を叩き込めるか？」
「この2時間でね……分かった、頑張ってみるわ」
「ああ、頼んだ」
「それと葵、」
「何だ？」
「あんな協定結んじゃって……勝つ見込みはあるんでしょうね？」
「ああ、向こう……いや、俺以外気づいていないが、──あの協定には隙がある」

そして、Ａクラス対Ｆクラスの幕が上がる。

第１２問　最後（？）の作戦会議（後書き）

次回、Ａクラス戦。

第13問　絶対勝利の札～final　spell　attack～

2時間後……

「では、両名とも準備は良いですか？」
「ああ」
「……問題ない」
Fクラスからは明久、姫路、秀吉、ムッツリーニ、雄二の5人が出ることに。
「それでは1人目の方、どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」
Aクラスからは佐藤美穂さん。そしてこっちからは――
「明久、行ってこい」
「え！？僕！？」
「ああ、お前はここで出さなきゃ作戦に支障が生じる」
「ふぅ……。やれやれ、僕に本気を出せってこと？」
「そうそう、それでくだらない事言ったら潰すからね？」
「サー、イエスサー！」
ああ、幽香の威力だと明久の能力でも喰らうんだったな。
(明久の能力は一定の上限を超えると発動しなくなる。)

「それでは、始めて下さい」
「　試獣召喚(サモン)！」
Aクラス　佐藤美穂　物理389点
VS
Fクラス　吉井明久　物理　62点
5分ほど粘ったものの結局負ける。けど明久を使った理由は勝つた

めじゃない。
「おいおい……こんなに苦戦するか？」
「い、いや、今のは偶然じゃないか？」
「そうだと思いたいが……」
そう、目的は相手の動揺。同時にそこに集中させる事で協定の穴を気づかせなくする作戦。
「では、二人目の方、どうぞ」
「じゃ、アタシがいくよっ」
Ａクラスからは木下（姉）。
「ワシがやろう」
そして、Ｆクラスからは秀吉。
「ところでさ、秀吉」
「なんじゃ？姉上」
「Ｃクラスの小山さんって知ってる？」
「はて、誰じゃ？」
うん、作戦通り。
「じゃあいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」
「うん？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」
ごめん、秀吉。後でプリンでも奢るから許してくれ。

「姉上、勝負は━━どうしてワシの腕を掴む？」
「アンタ、Ｃクラスで何してくれたのかしら？どうしてアタシがＣクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなぁ？」
「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して━━あ、姉上っ！ちがっ……！その関節はそっちには曲がらなっ……！」

ガラガラ
木下（姉）が戻ってくる。
「秀吉は急用ができたから帰るってさ。代わりの人を出してくれる

？」

プリンをパフェにしないと許してもらえそうに無いな。

「なら、秀吉が急に出れなくなったんだし、私が出ても問題ないよね？科目は古典でお願いします」

「……っ！しまった……！」

この条約の一つ目の穴、それは代表の代理の場合は例外であること。向こうは多分『そんな事あるはず無い』と思っていただろうが、こっちはそれを見越して秀吉を入れたんだ。……もっとも、秀吉が危険な状態にあるが。

「それでは、始めて下さい」

「「試獣召喚（サモン）！」」

Ａクラス　木下優子　古典３２８点

「残念ね、古典は私も得意なのよ」

「……葵、寝ていい？」

「せめて倒してから寝てくださいよ……」

「フン、あまりにも点数が高いから怖気づいたの？」

「何を言ってるの？恐怖を覚えるのは━━

Ａクラス　木下優子　古典３２８点

ＶＳ

Ｆクラス　風見幽香　古典１０１１点

━━貴女の方よ」

「「「何ぃぃぃっ！？」」」

「信じられません……！」

その点数にＦクラス、Ａクラスは勿論、高橋主任すら驚いている。

……相変わらず古典じゃ点数おかしいな。

「せめてスペルで苦しまずに葬ってあげる……幻想式決闘流儀、『幻想に咲く花』」

まず適当な2点から十字にレーザーが出る。そして、

「くっ……あの隙間を避けるのもつらいわね……」

その適当な2点を中心に円状に2列弾が発射される。

30秒後……

「避け切れな……きゃぁぁっ！」

まあ被弾した瞬間レーザー↓円状にばら撒かれる弾↓レーザー↓……

……と半永久的に続くわけだ。

Aクラス　木下優子　古典0点

VS

Fクラス　風見幽香　古典889点

「勝者、Fクラス風見幽香」

これで1対1か。

第１３問　絶対勝利の札～ｆｉｎａｌ　ｓｐｅｌｌ　ａｔｔａｃｋ～（後書き）

スペルカード紹介
『幻想に咲く花』
風見幽香のラストスペル。ランダムに2点が選ばれ、そこから十字状にレーザーが放たれた後、選ばれた2点から円状に弾が放たれる。１０秒経過ごとに選ばれる点が1箇所づつ増え、レーザーと弾の発射間隔も短くなる。
本編にも書いてある通り、一度被弾すると無敵が無い限り抜け出せない。そのため召喚獣バトルでは一回の試召戦争につき1度のみの使用、被弾から１０秒後に強制解除となるが、それでも４００点はダメージが入る。
上位スペルに『幻想世界の花畑』が存在する。

第１４問　隠された効果（ちから）（前書き）

ほんのちょっと遅れた３回戦になります。

第１４問　隠された効果（ちから）

「では、３人目の方どうぞ」
こっちからはムッツリーニ、向こうはショートカットでボーイッシュな女の子が出るみたいだ。
「教科は何にしますか？」
「……………保健体育、形式は代表者以外を一人選んでのタッグマッチ」
「しまった…………！」
あ、もう気づいたか。向こうの代表。
「まあ向こうも気づいちまった事だし、Ｆクラスからは俺が出るぜ？」
あの条約のもう一つの穴、それはあくまで代表者として出てはいけないという事。
今回の場合、俺は『代表者』としてではなく、あくまで『パートナー』としての出場。結局あれは出場を禁止しているようで全くしていないって訳だ。
「ならＡクラスからは私が出ます！」
その声の元は、
「早苗…………！」
「久しぶりですね、葵さん」
もう突っ込まない。何でここにいるのかとか言わないから。
「悪いけど勝たせてもらうぜ！　試獣召喚（サモン）！」
「こっちだって負けられないんです！　試獣召喚（サモン）！」
「では、始めて「「うぉぉぉっ！」」くだ……さい……」
向こうの武器は……弾幕！？畜生、最高に不利な相手じゃねぇか！
「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニ君」
って向こうもやばいけど大丈夫なのか！？
「問題ない…………《加速》」

ムッツリーニの召喚獣がかろうじて見える速度で加速し、斬りつける。まず一人倒れ――

Ｆクラス　土屋康太　保健体育４９８点
Ｆクラス　向日葵　保健体育４６１点
ＶＳ
Ａクラス　工藤愛子　保健体育２４６点
Ａクラス　東風谷早苗　保健体育３１１点

てなかった。
「確かに心臓のあたりを狙ったはず……」
よく見ると、ムッツリの召喚獣に焦げた跡があった。
「さっきのお返しですよ、葵さん」
「……やっぱりな」
おそらく加速の発動直前、もしくは加速中に弾幕を当てて僅かに軌道を「考えてる暇はないですよっ！」危なっ！けど、点数の減りからして一発の威力はあまりないはず。最悪強引に突っ切っていけば
「くっ……！（ピラッ）」
「卑怯なっ…………！（ブシャァァッ）」
……もう何も言えない。
「仕方ねぇ……憑依、対象は土屋康太」
Ｆクラス　向日葵（土屋康太）　保健体育４０１点
ＶＳ
Ａクラス　工藤愛子　保健体育２４６点
Ａクラス　東風谷早苗　保健体育３１１点
「工藤さんは前線で攻撃してください！私は後ろから援護します！」
切り替わり早ぇーじゃねぇかオイ。
「やぁっ！」
「っと……」
「そこです！」

「うおっ！？」
現在、大ピンチ。あの動きからしてムッツリの腕輪の弱点の『攻撃中の使用不可』を理解してるはず。抜け出す策はあるが、奇策である以上、チャンスは一度きり。
「おらぁっ！」
「おっと……」
早苗との距離は約５メートル。一か八か――勝負！
「うりゃぁっ！」
「甘いよっ！」
こっちの小太刀での攻撃にあわせて腕輪の効果で電撃を付加した斧を当てに来る。けど、本命はこっちじゃねぇ！
「　打消加速（キャンセルブースト）」
「くっ……なんで止まらないんですか！？」
加速のすれ違いざまに攻撃をヒットさせる。
例え弾幕を濃くして攻撃を当てようと、この腕輪は攻撃を無視してただ加速するのみ。勢いのまま召喚獣の攻撃が早苗の召喚獣に直撃し――

Ｆクラス　向日葵（土屋康太）　保健体育１３７点

ＶＳ

Ａクラス　工藤愛子　保健体育０点
Ａクラス　東風谷早苗　保健体育０点

――勝負は決した。
「何で……攻撃中は使えなかったはず……！」
「早苗、確かにそれはムッツリーニの腕輪では合っていたさ。けど、俺が憑依したからといって同じとは限らないだろ？」
「……真逆でしたか」
「ああ、憑依腕輪とでも言ったほうがいいのか？俺の腕輪は変化する、全く違うものにも、性質が変わるものにも……な」
「そうでしたか……次は負けませんよ」
「次来たとしても勝ってやるさ」

第１４問　隠された効果（ちから）（後書き）

憑依腕輪について

・葵の腕輪使用時に４００点以上残っている（実質４５０点以上で腕輪を発動しなければならない）

・憑依先が腕輪を持っている

この条件を満たしていれば発動可能。

打消加速（キャンセルブースト）

ムッツリーニに憑依時使用可能。

攻撃時のみの発動だが、《加速》よりも長距離の加速が可能。

第１５問　普通って何だっけ？（ｂｙ葵）

「これで2対1、Ｆクラスのリードです。４人目の方、どうぞ」
「あ、は、はいっ、私です」
Ｆクラスからは切り札の姫路が、
「それなら僕が相手しよう」
向こうからは学年次席である久保が出てくる。
「ここが一番の心配所だな」
そう雄二が言うのには理由がある。いくら振り分け試験を俺、幽香、姫路がリタイアして学年次席とはいえ、お互いの差はほぼ存在せず、あっても２０点程度。姫路の調子次第では負けもありうるＡクラス要注意人物の一人だ。
「では、科目はどうしますか？」
「総合科目でお願いします」
こっちが選択権2回使用＋最後の作戦用の選択権1回でこっちはもう選べない。
「総合科目か……まずいな」
総合科目はお互いの学年順位の差が直接出てくる科目である以上、向こうも相当な自信を持っているはず。
「それでは、始めてください」
お互いの召喚獣が呼び出される。

Ａクラス　久保利光　総合科目４００１点

ＶＳ

Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目４５０３点

「ま、マジか！？」
「いつの間にこんな実力を！？」
「この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！」
Ａクラスから驚きの声が上がる。点数差５００点は総合科目では遥かに大きいっ……！

「ぐっ……！　姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ？」
「……私、このクラスのみんなが好きなんです。人の為に一生懸命な皆の居る、Ｆクラスが」
「Ｆクラスが好き？」
「はい。だから、頑張れるんです」
会話が終わると同時に攻撃を仕掛ける姫路。
「よっと……」
それを何事も無く……ってちょっと待て。いくら姫路が連戦で疲れてるとはいえ、回避はそう簡単ではないはず。こりゃ何か一波乱あるかもしれないな。

数分後。

Ａクラス　久保利光　総合科目２８３１点
　　　　　　ＶＳ
Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目３０２９点

ほぼ互角の戦い。いや、差が縮まってきている以上姫路が不利って所か。
「やぁっ！」
「そこだっ！」
こりゃまずいな。今のはクリティカルヒット――１０００点は削れた可能性はある。

Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目１５９８点

逆転されたか。それにしてもあの動き、まるでそう動くのが分かっていたような動き――まさか。
「お前、まさか――」
「気づいたみたいだね。僕の能力は『５秒先までを見る程度の能力』だよ」
やっぱり能力持ち……って、この文月学園人外多すぎないか？
「さて、そろそろ終わらせようか……《高速決闘（スピードバトル）》」
周囲に結界らしきものが張られる。

Ａクラス　久保利光　総合科目２３６４点
ＶＳ
Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目１３１２点
なるほど、あの中にいる間は断続的に点数が減っていくのか。
「くっ……まだです！」
Ａクラス　久保利光　総合科目１７４６点
ＶＳ
Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目１０１１点
恐らく点の減り方からして持って後１０秒。
「《熱線》！」
おお、腕輪を━━後ろ！？
「その加速も見切った！」
読まれてた！？いや、あの能力があるのは姫路も分かってたはず。
「今です！」
成程、前に放つことで攻撃と同時に止まるって事か。
「っ……！」
「やぁぁぁっ！」
後ろを取った！これはもう時間との勝負となるが……
「いけぇぇぇっ！姫路ぃぃぃっ！」
姫路の剣が久保の召喚獣に直撃すると同時に、久保の剣も姫路の召喚獣に突き刺さる。
Ａクラス　久保利光　総合科目０点
ＶＳ
Ｆクラス　姫路瑞希　総合科目０点
「お互いが同時に０点となったため、引き分けとします」
決着のときは、刻一刻と近づいていた。

第１５問　普通って何だっけ？（ｂｙ葵）（後書き）

腕輪：高速決闘（スピードバトル）

自動的に一番近くにいる相手を選び、自分と相手の距離を半径とした円状の結界を張る。その中にいる間は毎秒１０点（総合科目では１００点）づつ減っていく。腕輪発動時の点数消費はない。

能力説明：５秒先をまでを見る程度の能力

その名の通り、使った瞬間から5秒先までが見える。ただし、使用してから1分経たないと再び使用できない。

第１６問　戦闘終了！……なのか？（前書き）

問題　次の（　）に正しい年号を記入しなさい。
（　）年　キリスト教伝来

霧島翔子の答え
１５４９年

教師のコメント
正解です。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え
雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った１９９３

教師のコメント
ロマンチックな表現をしても、間違いは間違いです。

風見幽香のコメント
私の苦労を返しなさい。

第１６問　戦闘終了！……なのか？

「最後の一人、どうぞ」
ここにきて高橋主任の表情にわずかな変化が。
「……はい」
向こうからは学年筆頭である霧島翔子が、
「俺の出番だな」
代表である雄二が出る。
「教科はどうしますか？」
「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は１００点満点の上限ありだ！」
その一言に、Ａクラスからざわめきが生まれる。
「上限ありだって？」
「しかも小学生レベル、満点確実じゃないか」
「注意力と集中力の勝負になるぞ……」
「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少し待っていてください」

視聴覚室。
「では、最後の勝負を行います。制限時間は５０分、満点は１００点です。不正行為などは即失格になります。良いですね？」
「……はい」
「わかっているさ」
「では、始めてください」

所変わってＡクラス。
「……幽香、正直どうだ？」
「流石元神童だけはあって飲み込みは早かったけど……正直付け焼

刃で満点は厳しいわね」
「「「うおぉぉおおおおお！！！」」」
「……多分あの問題が出たのね」
「ああ、これで少しは楽になりそうだ」

「では、結果です」
日本史テスト　小学生レベル　１００点満点
Ａクラス　霧島翔子　９７点
　　　ＶＳ
Ｆクラス　坂本雄二　６１点

「えっと……この場合はどうなるんだ……？」
「普通に考えるなら、代表を一人選んで勝負を決めるはずだけど……」
とは言っても、正直それでは厳しいといわざるを得ない。
「俺たちＦクラスは、Ａクラスに停戦協定を申し込む」
「何よ、そんなの受けるわけ……」
「……優子、ここは受けたほうがいい」
「何でよ！相手は所詮Ｆクラス……」
……こいつ、そっちの大駒の状況を全く理解してないみたいだな。
「冷静に考えてみな。そっちの上位６人が今どうなっているかを」
「確かに４人は戦えないけど、まだ代表が……」
チッ、めんどくさいな。
「霧島、今のお前の日本史の得点は？」
「……９７点。戦っても多分勝てない」
「代表なのにそんなに低いわけが……ああっ！」
「やっと気づいたか。召喚獣の点数ってのは最新の点数が反映される……つまり、最後に受けたテストは上限１００点のテストって事だ」
もっとも、これに気づいたのは終わった直後だけどな。

「……要求は何よ」
「お互い3ヶ月の宣戦布告の禁止、Fクラスの設備を……間を取ってCクラス並までの上昇ってところだな」
「……今度は何を企んでるの？」
何を言ってるんだか。
「俺は別に何も考えちゃいないぜ？　それに、こんな楽しい戦い（パーティー）を1週間で終わらせるのは勿体無いだろ？」

その後、停戦協定を結んでFクラスに帰る――はずだった。
「さて、帰って一緒に何か買いに行こ♪」
「……飯にしちゃ早いと思うんですが。あと俺の腕に抱きつかないでください」
「だ、駄目ですよ！　葵さんとはこのあと予定があるんです！」
「早苗、そんな予定無かったはずだけど！？」
「いーや、私と行くの！」
「私です！」
「あ、ウチもそういえば」
「「島田は黙ってて！」」
「うう…………」
何ていうか……ゴメン。この二人のせいで。
「早く行きますよ！」
「ぐぇっ！？　さ、早苗、首が、首が苦しい！」
俺は思った。俺の周りの女性って何でこんなのしかいないんだろうって。

第１６問　戦闘終了！……なのか？（後書き）

やっと試召戦争編終了。

ＰＶ１９０００、ユニーク４０００突破しました。こんな小説をお気に入り登録してくれた人、感想を下さった人もありがとうございます。これからもこの小説をよろしくお願いします。

番外編　デートらしき何かと書いた日常。（前書き）

前回のあらすじ。

拉致された。（ｂｙ葵）

番外編　デートらしき何かと書いた日常。

「ねぇ、葵にこの服とか似合いそうじゃない？」
「風見さん、こっちもいいんじゃないですか？」
「うーん……そっちも捨てがたいわね……」
「俺どっちも着ないからな！？」
事は数分前にさかのぼる……
「葵さん、どこに行きます？」
「決まってないのに連れてかれる俺って……」
「あら、丁度服も買いたかったしあそこでいいんじゃない？」
そう言って服屋であろう『永夜翔』を指す。斬新過ぎるネーミングだな。

……で、今に至るわけだが。
「俺どっちも着ないからな！？」
まあね、目の前にあるのがスカートかスカートの二択じゃこう言うしかないよ。
「むぅ～……どうしても着てくれないんですか？」
「いや俺男だし……それにだ、流石に女装は店に迷惑がかかるぜ？」
「面白そうだからＯＫです！」
最近思う。こっちの世界って幻想郷より常識が仕事してないんじゃないかって。
「店員仕事しろぉぉっ！」
「さて、店員さんも許可してくれたみたいだし……ね？」
「何！？俺が着る事は確定なの！？」
「勿論よ」
デスヨネー。
で、（強制的に）着替えさせられた結果。
「はう……可愛いです……」

「うん、いい感じね。気分はどうかしら？」
「今すぐ着替えたいです（即答）」

結局不満がられながらも着替えて店を出る。（着替えさせられた服は想像にお任せします。）
「で、次はどこ行く？」
「今すぐ帰りた《グゥゥ～》……飯をください」
何でこんな時に腹の虫が鳴るんだ畜生。
「あら、丁度空いてるみたいだしあそこにしない？」
今度は『ザ・クレープ』か……クレープで腹が膨れるかはともかく、ネーミングが適当すぎる。
「お、いらっしゃい」
「私はアップルシナモンね」
「私もそれでお願いします」
「俺は甘い具材全部で」
「はいよっと……」
「幽香に早苗、外で待っててていいぞ」
そして外に出る女子（？）二人組。
「兄ちゃん、今日はデートかい？」
「拉致られました」
店員さん、むしろあれをデートって呼ぶのかどうかすら怪しいです。
「そっちも大変なんだなぁ……」
『そこのねーちゃん、俺たちと一緒にガフゥッ！？』
あ、チンピラっぽいのが来た。けど相手が悪すぎる。
『ヤ、ヤスオッ！？』
「兄ちゃん、ヒーローになるチャンスだよ？」
「いや、俺が行っても
『ゴメン、ついうっかり手が滑っちゃって♪』
ただの足手まといになるだけですよ」
『て、てめぇぇっ！』

パンチを何事も無く受け止めて――
『やぁっ！』
早苗の躊躇無いアッパーがチンピラＡ（仮名）に突き刺さる。
『くっ……そがぁぁっ！』
あ、ナイフ持って突撃しちゃった。そして幽香は真顔で傘構えてるし。
『どんな物も極限まで速くなれば直線になる……特別に見せてあげるわ、元祖『マスタースパーク』』
チンピラさん、あなたの事は忘れません。（多分）
「最近の女子はレーザーも放つのかい？」
「すいません、何か認識が間違ってませんか？」

こんなくだらない会話をしているうちに出来上がるクレープ。
「ほいっと……とりあえず全部のせね」
「おっと……ちょっと早苗、持っててくれ」
で、残りのクレープ×2を手に取る。
「おーい、クレープ返し……」
見ると、半分以上無くなっていた。
「まさか、食った？」
「い、いや！そんな訳ありませんよ！」
「そうよ、待ちきれずに食うわけ無いじゃない」
「……二人とも、顔にクリーム付いてるぞ」
「「ええっ！？」」
その後、ちょっとお話（肉体言語じゃないよ？）して。
「……ま、いいか」
そんなめちゃくちゃな日常がいつも通りな俺であった。

番外編　デートらしき何かと書いた日常。（後書き）

こういうストーリーは疲れる。そしてAクラス戦の「勝ったほうは～」について。

正直あれ、個人的なものです。今回のデート（？）は風見のお願いに何故か早苗がついてきたみたいなノリ。

最後に一言。葵もげろ。

葵「何で！？」

第１６．１問　試召戦争編終了&２００００ＰＶ記念座談会（前書き）

正直適当に話してるだけなので飛ばしても全然構わない回。

第16．1問　試召戦争編終了&20000PV記念座談会

作「所詮作者と」
風「私と」
葵「俺が適当に話すだけのコーナーだ」
作「で、何かある？」
風?葵「無いな」

〜葵について〜
作「うっ……」
風「要するに作者の実力不足でしょ？」
作「ああ、そうしたら面白いように書きやすくなった」
葵「それで俺が出てきたのか」
作「驚くほど動かなかった」
風「で、オチは？」
葵「なるほど、俺はいなかったんだな」
作「実はもともと、風見だけでやるつもりだったんだ」

〜早苗の登場〜
葵「これも結構意外だったんじゃないか？」
作「正直モブの名前を考えるのが面倒だった」
風「でしょうね。ところで何で早苗になったのよ？」
作「案としては鈴仙もあったけど、こっちに連れてくる理由がなかった」
風「葵がいるからって事にすれば良かったんじゃない？」
葵「俺って餌なの!？」

〜程度の能力〜
葵「何であんな使い勝手の悪い能力にしたんだよ？」

作「面白そうだったから」
風「そういえば吉井も能力持ちだったわね？」
作「ああ、ちなみにFクラス主要メンバーは全員能力持ちの予定だから」
風「……思いつくの？」
作「大丈夫だ、問題ない」

〜最後に〜
作「いつの間にか２０００ＰＶだったよ！」
葵「こんなくだらない小説を読んでくれてありがとうございます」
風「こんな調子だけどよろしく」

〜次章予告〜
「実は私、転校するかもしれないんです……」
試召戦争が終わったと思ったら、今度は姫路が転校!?
「勝てば全部解決って訳か。単純でいいじゃねぇか」
それを防ぐ為に、吉井や風見、葵達は召喚大会の優勝を目指す！
「噂ね……これは厄介よ」
しかし、それを邪魔するかのような妨害。
「テメェ達……一回死ななきゃ分かんネェみてぇだナァ！」
そして、葵のもう一つの状態が明らかに!?
「悪いけど、俺は負けられない事情があるんだ！」
「勝負です！葵さん！」
果たして強敵（とも）との戦いに勝ち、転校を阻止できるのか!?
「そう、貴方達は私の友を傷つけすぎた」
『バカと花妖怪と召喚獣』、学園祭編をお楽しみに！
「どうしてこうなった……」

風「流石３０分で作っただけあって雑ね」
作「これが限度です……」

第１６．１問　試召戦争編終了&２００００ＰＶ記念座談会（後書き）

葵の幻想入り編を次書くかどうか迷う。

キャラ紹介（東方）

風見（かざみ）　幽香（ゆうか）
二つ名：四季のフラワーマスター
能力：花を操る程度の能力
葵によって無理やり文月学園に連れてこられる。八雲紫によって能力にある程度制限がかけられているが十分すぎる強さを誇り、ドSでもある。実は葵が好きらしい。

腕輪：幻想式決闘流儀
スペルカードを使える。１回につき１００点消費。色々制限があるが、詳しくは最後に。
得意科目：古典、日本史
苦手科目：物理、英語
得意科目では４桁は日常茶飯事、ただし苦手科目となると2桁も取れない事がある。その他の教科は大体４００点台。学年トップクラスの実力を誇る。

東風谷（こちや）　早苗（さなえ）
二つ名：祀られる風の人間
能力：奇跡を起こす程度の能力
八雲紫に「葵が取られちゃうけどいいの？」と言われこっちに来た一人。元々の守矢神社がたまたま文月学園の近くにあったためそこに住んでいる。（神様2人は基本的に幻想郷、ときどきこっちに来る）
やっぱり葵に惚れているとか。葵爆発しろ。

腕輪：？？？？（作中で４００点を超えていないため不明）
得意科目：数学、化学
苦手科目：日本史、世界史
得意科目である数学、化学は大体５００点前後。その他科目も３００点～４００点と高い位置だが、日本史、世界史が１００点位しか取れずAクラス内での順位は６位どまり。（恐らく学年内では一桁グループの下位）

～召喚獣式スペルカードルール～
一、戦争開始３０分前までにどのスペルを使うか学園長に申告すること。申告の無い場合は最後に申告した組み合わせとする。なお、使用枚数は５枚まで。
二、スペルブレイクについては以下の場合となった時。
二ー壱　スペルカードの切り替え時、前に使っていたスペル
二ー弐　スペル発動時から相手の攻撃により５０点以上減らされる
二ー参　スペルカード発動から一定時間の経過
三、壱の場合、通常スペルにおける参の場合、その日は該当するスペルを使用不可能とする。
四、弐の場合、もしくは耐久スペルか武器変化のスペル時において参の場合となった時、その戦争中は該当するスペルの使用不可。

第１７問　文月学祭物語（前書き）

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。
あなたが今欲しい物はなんですか？

姫路瑞希の答え
『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント
成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかもしれませんね。
写真館とかも候補になりうると覚えておくといいでしょう。

土屋康太の答え
『Hな本（訂正）　成人向けの本』

教師のコメント
取り消し線の意味があるのでしょうか？

吉井明久の答え
『カロリー』

教師のコメント
この回答に、君の生命の危機が感じられます。

向日葵の答え

『平和な日々』

教師のコメント

頑張ってください。

第１７問　文月学祭物語

清涼祭まであと1週間。お化け屋敷の為に教室を改造するクラス、「試験召喚システム」についての展示を行うクラスと色々あるが、俺達Ｆクラスは――
「勝負だ、須川君！」
「吉井！お前の球なんて場外に飛ばしてやる！」
そっちのけで野球をやっていた。
「葵……」
「俺に言われても……」
「貴様ら、準備をサボって何をしている！」
あ、鉄人。
「まあ、鉄人が来れば戻るだろうな」
「ええ、てっちゃんなら大丈夫ね」
「向日に風見、後で職員室に来い！」
「「断ります」」

「さて、そろそろ清涼祭の出し物を決めなくちゃいけないんだが……とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので後は任せた」
おお、見事なまでのやる気の無さだな。
ピーンポーンパーンポーン
『向日君、風見さん、今すぐ職員室に来てください』
「だってよ。俺たちは一旦離れるぜ？」
「ああ、悪い知らせを期待している」
「分かった、戻ったら一発な？」

職員室。
「高橋主任、何の用ですか？」
「向日君に風見さん、学園長室に行ってもらえますか？」
「はいよっと……」

学園長室。
「邪魔するぞ」
「よく来たね、実は話があるんだ」
「システム絡みの事は無理ですよ？」
「いや、ちょっと手伝いをしてもらいたくてね」
「……何ですか？」
「それは……これさね」
そう言って、どこかから真っ白な腕輪と黒い腕輪、そして虹色の腕輪を取り出す。
「……システム関係は無理って言いましたよね？」
こいつは話を聞いていたのか？
「いや、これは召喚大会の賞品さね」
となると……一番右の黒いやつと真ん中の白いやつが優勝賞品の『黒金の腕輪』と『白金の腕輪』で虹色のやつが3位賞品の『赤金（あかがね）の腕輪』って事か。……全然銅っぽくないな。ちなみに、
優勝賞品：賞状＋盾＋『白金の腕輪』＋『黒金の腕輪』＋『如月ハイランドプレオープンプレミアムチケット』
準優勝賞品：賞状＋盾＋『如月ハイランドプレオープンチケット』
3位賞品：賞状＋『赤金の腕輪』
になっている。優勝との差が激しすぎるけど気のせいだよな。
「で、これらに何か異常があるから回収してくれと」
「察しがいいさね。とはいっても、問題があるのは黒金の腕輪と白金の腕輪だけどね」
「成程……要するに、俺たちに優勝してほしいと？」
「そういう事になるさね。それとプレミアムチケットにも嫌な噂が

流れているからね」
「まあ、教室自体の改善をしてくれるならやるが……」
「それ位ならいいさね」
助かった。これで飲食店をやるにしても少しはまともになる。
「あ、私からは召喚大会の科目を決めさせるって事ならいいわよ」
幽香、そういやいたんだったな。（忘れてた）
「好きにしな。……ところで、これだけやったんだから勿論勝てるんだろうね？」
「当然だ。最弱（さいきょう）のFクラスの力って物を見せてやるよ」
「私達を誰だと思ってるの？」
俺たちは教室に戻った。

「………どうなってんだよ」
よし、Fクラス前の廊下の状況を整理しよう。
・オロオロしてる姫路。
・その隣にいる何かが抜けていったような明久。
・俺達。

「おーい明久、どうした？」
「葵……モヒカンになっても僕達友達だよね……？」
「……集中『一点特化のマスタースパーク』」
そうそう、俺の装備がバズーカから指鉄砲になりました。小さいせいで霊力が少し貯まりにくいのが難点。
「痛ったぁぁっ！？」
「よし、戻ったか。……で、どうしてこうなってんだ？」
「あ、それなんですけど……」
「ん、姫路、何かあったのか？」
「実は私、転校するかもしれないんです……」
「む……成程ね。葵、要するに勝てば解決するのよ」

「……ああ、成程な」
「え？どういう事なの？」
明久、まだ理解してなかったのか。
「いい？恐らく原因は２つ。１つは教室自体、もう１つはクラス自体の学力よ」
「うん、何となく分かったけど、教室の改善なんて……」
「ああ、それはさっき呼び出されたときに交渉してきた。召喚大会に優勝したら教室を改善するってな」
「じゃあ、それなら……」
「そういう事だ。勝てば全てが解決。単純で面白いだろ？あ、お前らは俺が（勝手に）エントリーしといたから」

「……で、どうするのよ？」
「ああ、設備がまだ届いてないんだってな？」
前回、俺たちは交渉の結果Cクラス並の設備にはなったわけだが、いまだ届かない。何でも来るのは清涼祭終わりだとか。
「飲食店となると、テーブルとかも必要だし……」
「テーブルを買うにしても予算がな……あ、幽香！先に帰っててくれ！」
「えっ、どこに行くの………」
買えなければ、作ればいい。材質が中華には合わない気もするがテーブルクロスでどうにかなるか。俺は制服のまま、とある場所に向かった。

第１８問　俺と神社と後悔

「早く空飛びたい……」
現在、守矢神社前。紅魔館の選択肢もあったが、レミリアの願いを聞くのが面倒なのでこっちに。
「おや、お客さんが来るなんて珍しいね……って葵か。立ち話もなんだしお茶でもどうだい？」
丁度よく今回必要な机用の素材を持っている本日の交渉相手、八坂神奈子さんがいました。
「それじゃ、お言葉に甘えさせてもらいますね」

客間。

「あれ、何で葵さんがいるんですか？」
「ああ、葵が俺と結婚してくれだとよ」
「俺そんな事一言も言ってないですよ！？」
「そ、そんな……葵さん……／／／」
今、ここに来たことを激しく後悔してるよ。
「そして早苗ものるなぁぁっ！」
「で、本当はどんな用なんだ？」
「それは…………」

少年説明中……

「成程……構わないよ」
「ふう……これで何とかなったか」
「それじゃ、さっそく作るのかい？」
「ええ、お願いします」
今回の工程。

1、神奈子さんに御柱を出してもらう。
2、俺の霊力で作った剣でいい感じに部品を作る。
3、釘とかを使って組み立てる。
4、終わり。

30分後……

「…………………」
「葵さん、大丈夫ですか？」
「大丈夫じゃない、問題だ」
「早苗、今何時だ？」
結論、霊力切れを忘れていたため1個が精一杯だった。
「えっと……8時くらいですね」
どうやら2時間ほど倒れていたらしい。
「さて、俺はそろそろ帰るか」
「あの、もし良かったら泊まっていきませんか？」
「……ああ、そうしたほうが良さそうだな」
無理やり帰るって選択肢もあるけど、途中で倒れたらシャレにならないしな。あ、幽香にメールしないと。

to風見
机作ってる途中で倒れて守矢神社に泊まることになった。

ピピピピピ
返信早いな。えーっと、
from風見
アンタの荷物も持ってそっち行く。

ああ、そうですか。
「早苗、風見も来るらしいぞ？」

「へえ、賑やかになっていいですね（二人きりになれると思ったのに……）」

30分後。

「遅いな……」

ｔｏ風見
今どこだ？

ピピピピピ
相変わらずの返信の早さである。

ｆｒｏｍ風見
後ろを見なさい。

「後ろをって……うわっ！」
「……今のが戦いだったら死んでるわよ」
「そうですか……」
「せめて連絡してから行きなさいよ……別にアンタ一人の学園祭じゃないんだしさ」
「ああ、すっかり忘れてた」

その後、幽香に「覗かないでよ？」とか言われたりしたが、（覗いたかって？ わざわざ命を捨てたくないっての。）そんな訳で寝ることになったが……
「すう………」（右にいる早苗）
「むにゃ……葵～、お仕置きよ～♪」（左にいる幽香）
「どうしてこうなった………」
布団が1つしかなかったせいで3人無理やり入って寝る事に。ってか幽香、お前どんな夢見てるんだ。

第１９問　清涼祭、そして召喚大会開幕！

Ｆクラスの出し物、中華喫茶『ヨーロピアン』。
「葵、胡麻団子３つよ！」
「チャーハン２つ追加！」
「ああもう！中国でも連れてくるんだった！」
現在、大繁盛中です。ネーミングはともかく。ってか厨房が４人とか無理じゃね？
「幽香、召喚大会まであとどのくらいだ！？」
「１０分！」
「援軍を頼む！」

１回戦、科目は数学。
「ありゃ？早く来すぎたか？」
「丁度いいんじゃない？吉井と姫路の試合が見れるんだし」
「「「「試獣召喚(サモン)！」」」」

Ｆクラス　姫路瑞希　数学４４１点
Ｆクラス　吉井明久　数学　９４点
ＶＳ
Ｄクラス　鈴木悠太　数学１０１点
Ｂクラス　田中玲　　数学１６３点

「相手はＤとＢか。力を見るには丁度いいな」
「ええ、吉井の点も少し上がってるみたいだしね」

『くっ、攻撃が……』
『このっ……！』
「あーあ、明久に向かって攻撃しちゃってるよ」
「ええ、吉井の点数なら被弾してもたいした事はない。……まあ、合計でも姫路に届かないから仕方ないといえば仕方ないけどね」
『明久君！』
『分かった！』
明久の召喚獣が高く飛び上がると同時に姫路の腕輪の『熱線』が二人の召喚獣を包み込んだ。こりゃ終わったな。

Ｆクラス姫路瑞希　数学３９８点
Ｆクラス吉井明久　数学　７６点
ＶＳ
Ｄクラス鈴木悠太　数学　　０点
Ｂクラス田中玲　　数学　　０点

うん、やっぱり。
『勝者、姫路瑞希、吉井明久チーム！』
「順調に行くと何回戦だ？」
「４回戦よ。正直当たりたくないわね……」
「ああ、お互いが弱点をカバーしているのとあの信頼関係は正直俺でもきついな」

１０分後。
「それでは召喚大会第１回戦を行います！」
ああ、観客がいないと思ったら確か４回戦からだったな。
「赤コーナー、２年Ｆクラス風見幽香、同じく向日葵！」
「負ける気は？」
「全然しない」
「青コーナー、２年Ｂクラス岩下律子、同じく菊入真由美！」

最初からＢクラスか。多分大丈夫だろ。
「それでは召喚してください！」
「「「「試獣召喚（サモン）！」」」」

Ｆクラス　風見幽香　数学４２１点
Ｆクラス　向日葵　数学４０２点
ＶＳ
Ｂクラス　岩下律子　数学１７９点
Ｂクラス　菊入真由美　数学１６３点

「律子！」
「真由美！」
「「行くわよ！」」
成程、俺の方に集中攻撃か。確かに下手に真っ向から挑むよりはいくらかマシだな。
「よっ……と」
とりあえず策に乗ってあげるか。
「（風見、頼む）」
「（そんな事分かってるわよ）」
ったく、コンビネーションならアイコンタクト程度出来ないと。
「む………」
「さあ、追い詰めたよ？」
「覚悟しなさい！」
おいおい、何も策が無く隅に言ったと思うか？
「お前ら、これが――」
ドスッ、ドスッ！
それと同時に、背後から風見の傘が突き刺さる。
Ｆクラス　風見幽香　数学４２１点
Ｆクラス　向日葵　数学３９８点

VS

Bクラス　岩下律子　数学　0点

Bクラス　菊入真由美　数学　0点

「——2対2だって事を忘れてないか？」

「勝者、風見幽香、向日葵チーム！」

第２０問　俺と卑怯者と2回戦（前書き）

新年初投稿。

第２０問　俺と卑怯者と2回戦

１回戦も終了し、店に戻ると

「お、覚えてろよ！」

坊主とモヒカンが店から出て行きました。

ズドォン！

そして、赤い槍が通り過ぎていった。……これ何か見覚えがあるんですけど。

「絶対逃がさないわよ！　フラン！」

「うん！」

どう考えてもレミリアとフランです。本当にありがとうございました。

「戻ってきたが……何があったんだ？」

「ああ、ちょっとした営業妨害があってな。それよりも葵、お前は昔執事だったのか？」

思い出してみる。……そういえばあったな。

「ああ、一応な」

「へえ、そうだったの」

そんなこともありながら2回戦に。

「ありゃ、誰かと思えばいつぞやの卑怯者じゃない」

「む、向日に風見、お前らが相手か！？」

「どうしたの？　相手がＦクラスだから勝ったも当然じゃない」

「風見コワイ風見コワイ…………」

根本恭二、戦線離脱。

「……それでは、始めてください」

「「「試獣召喚（サモン）！」」」

Ｆクラス　向日葵　　英語Ｗ３９２点

Ｆクラス　風見幽香　英語Ｗ　　８点

ＶＳ
Ｃクラス　小山友香　英語Ｗ１６５点
Ｂクラス　根本恭二　戦闘不能

「葵、ここは私一人でやらせてもらえる？」
「……5分。な？」
「十分よ。悪いけど、私一人で勝たせてもらうよ」
「たかが一桁のくせに……すぐに倒してやるわよ！」
そう言って、全力で突っ込む小山の召喚獣。
「そんな程度で私に勝つつもり？」
それを難なく避ける。
「……っ！偶然よ！」
しかし、何度やっても当たらない攻撃。それに対してカウンターを入れ、少しづつ削っていく。

Ｆクラス　向日葵　英語Ｗ３９２点
Ｆクラス　風見幽香　英語Ｗ　８点
ＶＳ
Ｃクラス　小山友香　英語Ｗ　８１点
Ｂクラス　根本恭二　戦闘不能

「あらあら、もう3分も経ってるわよ？」
「くっ……これで倒せるはず！」
ふーん、連続の切り払いか。
「飽きたしもう終わりにしてあげる。攻撃は……こうするのよ！」
わずかに横に移動し、傘で突きを胸に放つ。

Ｆクラス　向日葵　英語Ｗ３９２点
Ｆクラス　風見幽香　英語Ｗ　８点
ＶＳ

Ｃクラス　小山友香　英語Ｗ　０点
Ｂクラス　根本恭二　戦闘不能

そして、勝負は決した。
「勝者、風見幽香、向日葵チーム！」
「……まだその辺の妖怪の方が楽しめたわね」
ひどいな。まあ、否定できないが。
「ただいま～って、あまり客がいないな……」
「葵に～ちゃ～ん！」
「がふぅっ！？ってフランか、久しぶりだな。」
「久しぶりね、葵」
「ああレミリア、この客の少なさは何かあったのか？」
俺が大会に行くよりも格段に少なくなっている。これは何かあったと考えていいな。
～～♪～～～♪
メールだ。

ｆｒｏｍ早苗
葵さんの料理に文句を言っている人がいるんですけど、やっちゃっていいですよね？

理由判明。多分あの坊主とモヒカンだ。
ｔｏ葵
殺さない程度に頼む。

「葵、Ａクラスに行くぞ」
そんな雄二の声を聞き、Ａクラスへと向かった。

第21問　俺とメイドとAクラス

「ここまで来て何を言っているのさ！　早く中に入るよ！」
現在、Aクラスの【メイド喫茶『ご主人様とお呼び！』】前にいる。
実にメイド喫茶という常識にとらわれていないネーミングだ。言い争っている間に中を覗いてみる。…………あのメイド、ワープしてやがる。
「それじゃ、入るよ」
「……お帰りなさいませ、ご主人様にお嬢様。……今夜は帰らせません、ダーリン」
幽香が強引に雄二を引っ張って中に入る。
本日もこの代表はいつも通りだった。
「……お席にご案内いたします」
この広さの教室でも満席か。
「フラン、俺の頭の上から降りてくれないか？」
「やだ」
そして、フランを頭の上に乗せて行動しなければいけなくなった。
「……では、メニューをどうぞ」
「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」
「あ、私もそれがいいです」
「あら、私もそうするわ」
「僕もそうしようかな」
「葉月もー！」
「んじゃ、俺は――」
「それなら、俺も――」
「……ご注文を繰り返します」
あれ？　注文続いてたはずだけど？
「……『ふわふわシフォンケーキ』を5つ、『メイドとの婚姻届』

が2つ。以上でよろしいですね？」
「「全然よろしく（ねぇぞっ！？）ないからな！？」」
その直後に、フォークが5つ、雄二の前に朱肉と実印が置かれた。
俺のが無くて安心したよ。
「……咲夜さん、こんな所で何してるんですか」
「手伝いです。早苗さんから頼まれまして……」
「紅魔館の方は大丈夫なのか？」
「パチュリー様の防護魔法を外壁全体に張っているので心配はありません」
魔理沙なら破りかねないけどな。
「そうか。（小声で）こっちで能力は使いすぎるなよ？」
「分かりました。それでは失礼いたします」

『そうだな！2－Fの中華喫茶は不味かったしな！』
おっと、今回のミッションを忘れるところだった。
「ちょっと待ってくれ咲夜、あれはさっきからか？」
「ええ、30分ほど前から」
「引き止めてすまなかったな」

「って事で葵に明久、これを着てくれ」
「…………は？」
俺の目の前には、何故かメイド服があった。
「ちょっと待て、俺は着ないからな？」
「「葵？」」
「ちょっと待て幽香に島田、何でこっちを見ているんだ？」
「さ、着替えましょ？」
「嫌がっても無理やりやらせるわよ？」
あ、これ逃げられないな。

「くっ……！　なんでこんな目に……！」
「僕もだよ……」
「明久に葵、存外似合っておるぞ」

『とにかく汚い部屋だったよな』
『まあ、旧校舎自体汚いしな』
あいつら、まだやってたのか。丁度逃げられないし、いいか。
「お客様」
「何だ？って、こんな子もいたんだな」
「結構可愛いな」

怒るな……！　ここで怒って台無しにするわけにはいかない……！

「お客様、足元を掃除しますので少々よろしいでしょうか？」
「掃除？さっさと済ませてくれよ？」
よし、これで後は胸に当たっているように見せかけて……
「こ、この人今私の胸を触りました！」
「は？何言ってぐぶぁ!?」
「こんな公衆の面前で痴漢行為とはいい度胸ねぇ？」
……何か殺しそうなオーラを幽香が纏っているけど大丈夫か？
隣では坊主の方が倒れていた。そしてその頭に明久がブラを瞬間接着剤で付ける。うむ、見事な変態だ。
「幽香、どうする？」
「モヒカンを取ればいいんじゃない？」
「そうだな」
霊力でナイフを作り出し、髪を切り落とす。
「さて、痴漢行為の取り調べのために来てもらおうかしら？」

「ちっ！行くぞ夏川！！って俺のモヒカンが無いぞ！？」
「こ、これ外れねぇじゃねぇか！！畜生！！」
「……逃がさない」
そう言ってナイフを突きつける咲夜。時を操る能力は伊達じゃないな。

時を操る程度の能力：十六夜咲夜の能力。時を戻す以外は何でも可能。ただし、他人に干渉する事は出来ない。

「くっ、一旦戻って……」
「さて、ちょっと話をしないといけないですね？」
後ろから早苗。メイド姿可愛……ってそんな場合じゃないな。スペルカード持ってるし。
「さて、戻るか」
『……お会計は、夏目漱石を2枚か、坂本雄二、向日葵の2名のどちらかになります』
『坂本雄二と夏目漱石1枚でお願い』
『……ありがとうございます』
雄二が千円で売り飛ばされた。その後、叫び声が聞こえたような気がした。

第22問　戦色マスタースパーク

「3回戦は不戦勝？」
「ああ、相手が食中毒だとかでな」
食中毒ってまさか……
「（明久、姫路は厨房に入ったか？）」
「（ううん、入ってないけど……）」
どうやらここが原因ではないらしい。
「とは言ってもそろそろ客を入れないとまずいな。何かいい案は無いか？」
「任せておけ。安直過ぎるが、これでも効果はあると思う」
そう言って、水色と白のチャイナドレスを取り出す。
「成程、若干裾が短い気もするが、確かにインパクトがありそうだな」
「ああ、これを━━明久が着る」
すごいインパクトだ。
「坂本君……？」
「じ、冗談だ。これは姫路と島田と風見と秀吉と葵に着てもらう」
姫路の後ろに一瞬般若が見えた気がしたけど気のせいだと思いたい。
「俺が着るのは冗談だよな？」
「葵？」
「えーと、何の用ですか？」
「…………（ニコッ）」
「ハイ……着させていただきます……」
「弱いな、お前……」
「うるせぇ」
そんな訳で俺も着る羽目になってしまった。
「「お兄ちゃん、葉月（私）の分は？」」
「あー、フランに葉月だっけか？悪いけど、数が━━」

「…………！！（チクチク）」
「「ムッツリーニ！？」」
「……俺の嗅覚をなめるな」
何だろう、今だとかっこ悪い台詞に聞こえる。多分明久も同じだろうけど。

「葵、そろそろ４回戦よ」
「雄二、着替えていいか？」
「いや、そのまま出てほしい。そのほうが宣伝になる」
「マジかよ……」
そんな訳で４回戦。

「予想道理だな」
「ええ、やっぱり明久と姫路だったね」
「葵君に風見さん、絶対負けませんからね！」
「来い！」
「それでは、始めてください！」
「「「「試獣召喚（サモン）！」」」」

Ｆクラス　姫路瑞希　古典　４０１点
Ｆクラス　吉井明久　古典　１５１点
ＶＳ
Ｆクラス　向日葵　古典　５３１点
Ｆクラス　風見幽香　古典１１１９点

……俺たちって本当にＦクラス？週に１４回思う。

「しまった！風見さんと葵は古典が得意なんだ！」
ああ、風見はAクラス戦で見せたんだったな。
「さて……行くわよ！」
「瑞希！」
「明久君！」
やっぱり俺を狙ってきたか。しかも幽香の突撃を見てからのあたり、慣れてると考えていい。
「くっ……そっ！」
おまけにコンビネーションも抜群ときてる。この二人、今までの相手よりも強い！
「仕方ねぇ……幻符『トリック・オブ・チェンジ』」
「うわっ！？」
宣言と同時に明久が距離を取る。けどそこは――
俺の弾が出る場所。
「瑞希！周りをよく見て！」
「きゃっ！」
ちっ、避けられたか。
「時間もかけてられねぇ……決める！」
「ええ！元祖『マスタースパーク』！」
「『熱線』！」
マスパと熱線がぶつかり合う。けどその熱線は――
「決めてやる！見習『弱火のマスタースパーク』」
一方向、かつ自分の正面にしか放てない！
「危ない！」
それを明久が木刀で受け止める。……これ周りから見たら色々おかしい光景の気がする。
「くっ……うおりゃぁぁっ！」
そして、風見の方に打ち返す。常識？おいしいの？
「きゃぁぁっ！？」

Ｆクラス　姫路瑞希　古典　３３１点
Ｆクラス　吉井明久　古典　　３点
ＶＳ
Ｆクラス　向日葵　古典　１２５点
Ｆクラス　風見幽香　古典　５２１点

「くっ……花符『幻想郷の開花』」
「うわっ！？」
あ、こけた。
Ｆクラス　吉井明久　古典　０点
まあ、そうなるわな。むしろよく頑張ったよ。
「明久君！？」
「よそ見してる暇があるの？」
「えっ！？」
「これで……終わりよ！」
いつものように突きを放って、決着はついた。
Ｆクラス　姫路瑞希　古典　０点
Ｆクラス　吉井明久　古典　０点
ＶＳ
Ｆクラス　向日葵　古典　１２５点
Ｆクラス　風見幽香　古典　４２１点

「勝者、風見幽香、向日葵チーム！」
これで一応Ｆクラスの宣伝にはなったたか？そして、姫路と共に３人でＦクラスに戻る。……３人？
後ろを振り返る。
「…………（へんじがない。ただの屍のようだ。）」
「忘れてたぁっ！」
「明久君、しっかりしてください！」
「……これって私達のせい？」

そんな訳で、今度こそ４人（１人気絶）でＦクラスに戻った。

第22問　戦色マスタースパーク（後書き）

いい戦いだったでは終わりませんよ。はい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2082w/

バカと花妖怪と召喚獣

2012年1月14日13時54分発行